



しなやかな心を育む

校長 作田潤一

東日本大震災や熊本地震の際に、学校教育では「レジリエンス」という言葉が多く使われました。レジリエンスとは、気持ちが落ち込んでも回復できる力のことです。

レジリエンスは、生まれながらの差はあるものの、環境との関わりや大人の働きかけによって後天的に育まれます。多くの研究者が、子どもにレジリエンスを育むために、次のことを提唱しています、

1つは、子どもが自分に自信を持てるような大人の声かけです。子どもを成長させたい一心から、短所ばかりに目を向けると、子どもは「自分は足りない存在だ」とネガティブに受け止めてしまいます。「やればできる」という励ましよりも、できたか否かという結果ではなく、プロセスや意欲を重視した声かけが重要です。

もう一つは、人や社会とのつながりを実感させることです。「私たちが守っているよ」と、孤独感を拭い去るメッセージや働きかけを家族や教師がすることです。また、人や社会に感謝する大切さを近くにいる大人の姿で示すこともレジリエンスの基盤になると言われています。さらに、ボランティア活動等で周囲の人から感謝される経験や自分の存在意義を確認できる体験も効果が大きいと研究データは示しています。近くの大人が気持ちを切り替えるモデルであることも重要だと言われています。

子どもが今後長い人生を歩む上では、逆境や困難を避けることはできません。不安やプレッシャーを乗り越えるしなやかな心を育むことを意図した取組に努めてまいります。

御船町人権教育授業研究会

11月2日(水)に御船町人権教育研究会が開催され、御船中学校では近藤秀平教諭が1年3組で人権学習の授業を行いました。資料「一つ手



前の停留所」(人権読本「きずな」熊本県人権教育研究協議会編)には、「学習によって、差別をはね返す力を得たと感じた美紀さんが、社会の中で自分の出身を語れない疎外感や沈黙、視線という言葉に出てこない雰囲気を感じながらも、差別に対して改めて立ち上がり、自分のことを胸をはって語れるようになった姿」が描かれています。学習をとおして、「世の中にある差別や自分の中にある差別心に気づき、差別を許さないこと」、「自分や家族、仲間、故郷に誇りを持ち、人とつながろうとすること」について真剣に考える生徒の姿がありました。ある生徒は「自分も差別をなくす生き方をしていくために、家族や仲間を大切にしていきたい。」と授業を振り返っていました。

薬物乱用防止教室

11月22日(火)に、薬物乱用防止教室が1年生を対象に開催されました。御船警察署の結城卓也さんにお越しいただき、動画等を用いて「一度薬物を使用すると抜け出せ



なくなってしまうこと」「家族や周囲の人にも迷惑が掛かってしまうこと」などについて講話をしていただきました。生徒からは、「薬物の恐ろしさを改めて知った。『断る、離れる、相談する』ことを心がけていきたい」などの感想が聞かれました。

教科等授業研究会

10月から11月にかけて御船中学校で教科等の授業研究会が開催されました。授業研究会では御船中の4人の先生が研究授業を行いました。



【上益城郡教科等研究会】

理科：米原優花教諭 社会：矢野貴大講師
特別活動：浅見慎二教諭

【熊本県中学校保健体育研究大会】

保健体育(体育)：一門 翔教諭

保健体育の研究授業は県内の150人の先生方が参観されました。「体づくり運動」の単元で「自分に応じた、家庭でできる運動プログラムを作る」という授業を行いました。参加された先生方からは、「笑顔で友達と楽しく運動する姿がよかった。」「教え合う姿から、普段の仲の良さが伝わってくる。」という感想が出され、御船中生の素晴らしさが発揮された授業となりました。

ものづくり部

11月12日(土)にロボットコンテストの県大会が開催されました。そして、そこで出場権を獲得した4チーム14名が、12月3日(土)、4日(日)に長崎県で開催された九州大会に出場しました。

各チーム、自分たちのパフォーマンスを発揮し、1年生の道野流偉君、岩本快人君、小山楓君、野田伊織君のチームが「審査員特別賞」に入賞しました。

また、競技だけでなく、会場でのあいさつ、清掃、宿泊施設での態度など、様々な方から「素晴らしい!」とお褒めの言葉をいただくことができました。

